

「『日本人』であるかどうか」は どのように語られていたか

—東京五輪関連のネットニュースの コメント欄を対象にした内容分析から—

スポーツ文化研究領域
5020A029-8 久保颯馬

研究指導教員：トンプソン リー A. 教授

第1章 はじめに

第1章では、本研究の背景、目的とリサーチクエスションおよび意義について述べた。

近年、世界規模でナショナリズムが高まりを見せており、それは日本も例外ではない。また、このような社会情勢の流れとは関係なく、スポーツの国際大会(W杯や五輪など)がナショナリズムを高揚させるイベントであるとの指摘も先行研究ではなされている。ナショナリズムが排外主義やレイシズムなどの排他的な思想と結びつくと、ヘイトスピーチを生む。実際、日本では「在日特権を許さない市民の会」などが、ヘイトスピーチを含んだ大規模なデモを行っている。また、今や生活に欠かせなくなったインターネットの世界においても被害は深刻で、「ネット右翼」と呼ばれる層がヘイトスピーチ的なコメントを頻繁に投稿している。

ヘイトスピーチが攻撃対象としているのは、「『日本人』ではない人々」だ。ここで考えたいのは、「『誰が』『何を理由に』『日本人』である／ないと見なされるのか」ということである。先行研究では、「日本人」の輪郭が曖昧であることが指摘されている。つまり、何を理由に「日本人」と見なすかという「『日本人』の条件」は、文脈や個人によって変わってくる。2015年には、8つの「『日本人』の条件」について、「重要だと思うかどうか」を聞いたアンケート調査が行われている。8つの「条件」は、「重要である」と回答した人が多かった順に、「意識」「国籍」「言語」「制度」「出生地」「居住地」「血統」「宗教」である。

ここまで述べてきたことを踏まえ、【東京五輪に関連するネットニュースのコメント欄で、「『日本人』であるかどうか」がどのように語られているかを明らかにすること】を、本研究の目的とした。また、これに沿って2つのリサーチクエスション(以下RQ)を設定した。RQ①は【誰が「『日本人』である／ない」と見なされるか】、RQ②は【何を理由に「『日本人』である／ない」と見なされるか】である。先ほど言及した「『日本人』の条件」は、RQ②を検討するための指標として用いる。「『日本人』の条件」について検討している先行研究では、ほとんどでアンケート調査が用いられている。本研究では内容分析と呼ばれる手法を用い、先行研究とは違った視点から「『日本人』の条件」について検討するため、意義があると考えられる。

第2章 方法

第2章では、内容分析についての概観と、本研究の具体的な方法について述べた。

内容分析の主な対象となるのは、マスメディアやインターネットなどで流通する情報、すなわち「テキスト」である。そして、これらの情報を手続きに従って処理していくことで、「テキスト」が伝えようとしていることを明らかに出来る。

本研究が分析の対象とするのは、【東京五輪関連のネットニュースのコメント欄に投稿されている、「〇〇は『日本人』である／ない」という旨が含まれているコメント】である。そのため、まずはネットニュースを絞り込む必要があり、2つのネットニュースを対象とした。1つ目は、Yahoo!ニ

ユースの特設サイト「東京オリンピック・パラリンピックガイド」で配信されたニュースのうち、「日本代表」のキーワード検索でヒットしたニュースである。7/21～8/8 の期間中に配信されたニュースを対象とする予定であったが、データを収集している途中で特設サイトが閉鎖されたため、7/29 の 11 時 59 分までのニュースしか収集できなかった。2 つ目は、5 大新聞社が運用している Twitter アカウントで配信された五輪関連のニュースである。こちらは 7/21～8/8 の期間に配信されたニュース全てを収集した。分析の対象となるコメントは、「〇〇は『日本人』である／ない」という旨が含まれているコメントである。明確にこの構文を含んでいるコメントはもちろん、文脈からその旨が読み取れるコメントも含めて収集し、コーディングシート(図 1)に基づいてコーディングした。

図 1 コーディングシート

①記事の出典
URLを貼り付け
②記事の配信元
(配信元)を記入
③コメントの内容
コメント全文を貼り付け
④言及されている対象
(対象者)を記入
⑤対象がアスリートか
1. アスリート 2. アスリートでない
⑥「日本人」と見なされているか
1. 「日本人」である 2. 「日本人」でない
⑦言及されている「『日本人』の条件」
1. 出生地 2. 国籍 3. 居住地 4. 言語 5. 宗教 6. 制度
7. 意識 8. 血統 9. 外見 10. 文化 11. その他 12. 不明

第 3 章 結果と考察

第 3 章では、データを分析して得られた結果と考察について述べた。本文ではいくつかの観点から詳細にデータを分析しているが要旨では割愛し、2 つの RQ に沿って最終的にまとめたもののみを記す。

まずは、RQ①についてである。「『日本人』である」と見なされていたのは、「コメント主」「大坂なおみ」「日本代表選手」「韓国併合時の朝鮮系日本代表選手」「久保建英」「清原奈侑」などである。

一方、「『日本人』でない」と見なされていたのは、「大坂なおみ」「馬淵優佳」「返信元のコメント主」「毎日新聞の記者」などである。「『日本人』かどうか」の見解が分かれる人がある一方、ほとんどの人から「『日本人』である」と認められている人もある。言及されている回数が多かった「大坂なおみ」について大坂以外のデータと比較したところ、大坂は「『日本人』でない」と見なされやすいということが分かった。また、コメント主も言及されている回数が多かったが、「『日本人』でない」とするコメントは 1 件も無かった。

続いて、RQ②についてである。「『日本人』である」と述べる際には理由に触れないことが多いのに対し、「『日本人』でない」と述べる際には何かしらの理由に触れることが多い。「『日本人』の条件」別に見ると、「文化」は「『日本人』である／ない」のいずれでも多く用いられていた。「国籍」は「『日本人』である」で多く用いられていたのに対し、「『日本人』でない」ではほとんど用いられていなかった。「言語」は「『日本人』である」ではほとんど用いられていなかったが、「『日本人』でない」ではある程度用いられていた。「外見」は「『日本人』である」には全く用いられていなかったが、「『日本人』でない」では多少用いられていた。また、自分自身を「『日本人』である」と述べるときにはほとんどの場合、明確な理由を提示していない。「大坂なおみ」「馬淵優佳」「清原奈侑」「宇津木麗華」の比較から、「五輪での戦績」や「ネット空間での好感度」が、「『日本人』である／ない」の判断に影響を及ぼしている可能性が指摘できる。

第 4 章 おわりに

第 4 章では、本研究のまとめとして先行研究との比較や、研究の限界について述べた。

先行研究の通り、「日本人」の輪郭は曖昧であるものの、ほとんどの人から「日本人」だと認められる人もある。また、「『日本人』の条件」については、先行研究と多少の違いが見られた。

本研究の限界は、対象としたネットニュースの内容や媒体が限られることや、ネットユーザーが全「日本人」を代表しないことが挙げられる。